

フランス式連桁と Finale Ver.2008



上例の16分音符4つの符尾は少し変わっています。両端の2本は普通ですが、中の2本は連桁の作る白い窓に入り込まないように縮められています。

私はこのスタイルを我が国の出版譜で見たことがありませんが、それでも決して見慣れない姿というわけではありません。ショット社が出版したトロバヤテスコのギター譜の多くがこのような連桁を持ち、それらに長く親しんできた私にとってはこれはむしろ普通の形でもありました。

おそらく、インクの滲みという問題と関連するのではないのでしょうか。前回書きましたように、印刷技術の向上によって実際にインクで黒く潰れてしまうことがなくなっても、連桁両端を必ず五線ラインに接触させたり傾斜角を工夫したりして視認性と形を良くしてきたのが西欧の彫版楽譜の伝統です。その一つの典型が Henle 社の様式で、傾斜を極端に抑えることによって16分音符連桁内に五線ラインが入り込まないようにしていることは前回述べた通りです。

ただ、そのように傾斜を極度に緩くすることに異論があろうことも当然でしょうから、傾斜は音楽の流れに応じた適切な

ものにしつつ、せめて内部の符尾を窓から追い出して明るさを確保しようというのが、今回紹介する特異な連桁の骨子なのではないかと思われます。もちろん推測以上のものではありませんが。

ともあれ、Finale 日本語版 Ver.2002 から同梱されるようになったプラグインでは、このスタイルに「フランス式連桁」という名が与えられています。非常に扱いにくいプラグインですが、この「フランス式連桁」の自動編集は問題なく掛かりますので、相当に長い楽譜においても、すべての複数連桁に瞬時に適用することが可能です。

それにしても、なぜ「フランス式」なのか。ショットは19世紀中頃にマインツで創業された楽譜出版社で、少なくとも創業当時は特にフランスとの関係はなかったようです。あるいは、ドビュッシーやラベルの手稿譜でも目にすることが出来れば何か分かるかもしれないとは思っておりました。

最近になって実に興味深い楽譜を入手できました。不朽のギターデュオ「プレスティ/ラゴヤ」で今なお輝く天才、イダ・プレスティ女史作曲のギター独奏曲です。

この譜例は「セゴビア」と名付けられた作品の冒頭ですが、数少ないプレスティの作品の一つです。イタリアのベルベン社が2003年に出版したのですが、コンピュータ製の浄書譜はごく普通の出来ながら、それと共に作曲者の自筆譜ファクシミリが掲載されているところが重要です。

原版のスキヤニングは避けて、Finale でその姿を再現してみましたが、これぞフランス式連桁とも言うべきものでしょう。それどころか両端の符尾まで縮められていて、8分音符連桁が宙に浮いたような状態になっています。自筆譜の隅々まで見てみましたが複数連桁はすべて、32分音符や6連音符に至るまでこの形です。

イダ・プレスティは1924年生まれフランス人ギタリストで1967年に急死するまでの間、夫のアレクサンドル・ラゴヤとの二重奏で世界を席卷した偉大な音楽家でした。そのレパートリの大半は彼ら自らの編曲でしたので、楽譜を書く機会はい他のギタリストに比べてずっと多かったことでしょう。フランスの音楽家が全てこのように連桁を引いたのかどうかは分かりませんが、「フランス式連桁」の一つの証左とは言えます。

さて、この符尾を Finale でどう実現するかという点ですが、「道具箱ツール」の「連桁内符尾調整」を用いて1本ずつ縮めるという操作になります。この気の遠くなるような作業を自動化してくれるのが先のプラグインというわけですが、本例のように両端まで縮めるような仕様は想定外です。

けれども最新の Ver.2008 ならば、本例でも一括操作に近い作業が可能となります。ある拍で編集を終えたら、その連桁仕様を同一小節内の他の拍にでも他の小節の拍にでもコピー出来るからです。傾斜角までコピーされますので注意が必要ですが、以前のバージョンでは音符自体も含めない限りは小節の部分コピーが出来なかったのですから、この新機能は実に強力です。

日頃の楽譜浄書業務でこのフランス式連桁を採用することはないでしょうが、この新コピー機能は他の用途で効果的に使えます。ただ、EPS 生成で符尾の太さが無秩序になってしまふという欠陥が Mac 版 2008b にて解消されたのに比べて、Win 版は未解決のままです。これは次の 2009 にぜひ期待したいものです。

2008年7月 梅本雅弘